

講演 2

矢作川をきれいにする会の活動

—30年のあゆみを越えて—



矢作川をきれいにする会
会長 鈴木 陽子

私たち「矢作川をきれいにする会」の活動を皆様にご存知いただき機会を与えていただきましたことを、心から感謝申し上げます。何分にも不慣れでございますが、発表させていただきますので、よろしくお願いいたします。

私たちの住んでいる一色町は、矢作川の最下流に位置し、知多半島と渥美半島に抱かれ、三河湾に面した大変温暖な半農半漁の町です。人口は2万5000人。そして、毎年8月26日には日本一の大提灯（おおちょうちん）でも大変有名な町です。

産業といたしましては、うなぎ養殖、のり養殖、クルマエビ、アサリ、アオヤギ、カーネーション、えび煎餅などがあります。中でも、アサリ、アオヤギにおいては、「取る漁業」から「育てる漁業」への転換を図るため、アサリ、アオヤギの種子を放流しております。その結果、定着性資源である貝類の計画生産ができるようになってまいりました。また、ただいまでは県下でも重要な貝類の産地となっております。

それでは、「矢作川をきれいにする会」の結成に至る当時の状況について申し上げます。

昭和40年代は高度経済成長期でありまして、各地で開発行為が進み、工場の建設やゴルフ場の造成、住宅用地の造成が至るところで盛んに行われておりました。また、矢作川の上流では山を崩し、砂利やけい砂を取る人たちが、また、工場からは、排水の垂れ流しにより、常に白濁した汚れた水が流れていました。私たち下流域住民は、四季循環する自然としての水の流れそのものが生産手段であり生活の命であります。企業の排水の垂れ流しに目をつむり、そして乱開発を黙認している現実、激しい怒りさえ覚えました。

毎年、海には赤潮が発生したり、アサリ漁場にはヘドロが堆積して、放流した貝類の種子も酸欠のために死んでしまうのが現状です。それは、のり養殖だけではありません。一色町の地場産業である漁業にも大きな被害をもたらしました。このままでは矢作川は死んでしまう。そして、命の海までも死んでしまうのではないか。母なる川、矢作川を守るにはどうしたらよいか。私たちはいろいろと話し合いを重ねました。

そこで、漁業で生計を立てている私たちは、男の人や人任せではだめだ、男の人は仕事に行ってもらって、自分たちが団結をして公害防止に努めるよう、そして泥水公害に泣く、矢作川を再び昔の清流に戻そう。みんなの気持ちは一緒でした。そして、昭和 46 年、立ち上がったのです。これが現在の「矢作川をきれいにする会」の前身となる若妻会です。みんなでバスに乗って、汚染源とみられる地域に繰り出し、自分たちの手で公害防止に取り組み、水質についての勉強をしようと、何回も何回も現地視察をしたのが始まりでした。

こうして、昭和 48 年 8 月、1,300 名で「矢作川をきれいにする会」を結成し、矢作川上流パトロールを実施することを決めました。矢水協の前事務局長、内藤連三様のご指導を頂きながら、パトロール隊を編成し、汚水源の追跡には長野県、岐阜県まで延べ 300km にわたり、山砂利採取場や造成工事現場を回り、矢作川の水がいかに大切であるか、そして汚染物質の垂れ流しを止めるように説得をするなど、ねばり強い運動を続け、公害防止に努めてまいりました。

「矢作川をきれいにする会」の結成当時は、上流部の人たちにも中々理解してもらえず、いろいろな対立もあって大変でしたが、さまざまな話し合いの中で、「流域の生活圏は一体であり運命共同体である」、人を責めるよりもよく理解してもらうことが大切ではないかと。こうした考えのもとで、上流部の皆様のご理解を頂き、昭和 52 年、岐阜県恵那郡明智町と姉妹提携を締結することができました。また、上流部の皆様と手を結んだり、姉妹提携のご縁で、昭和 53 年から、上流部の学校の子供たちとの交流も始まりました。矢作川上流部の皆様と私たち下流で生活する者の交流事業は、現在、事業の中枢を担うものになっております。

矢作川上流・下流の交流事業の中心となる「山の子の潮干狩り招待」は、矢作川の上流に住む子供たちを矢作川最下流の一色町に招待し、矢作川を結んで水資源を思い、力を合わせて水をきれいにしていこうという事業です。私たちは毎年この事業をみんな楽しみにしております。

この「山の子の潮干狩り招待」は、昭和 53 年からの事業で、今年実施した潮干狩りに引率して見えた先生から、「小学校のときに招待をしていただき、アサリを採ることを教えていただいた生徒です。今年は小学校の先生になって子どもたちを連れてきました。その時のことを私はいまだによく覚えております。」と言われ、私はこのような形で再会できたことに「矢作川をきれいにする会」の長い歴史を感じました。あんなにかわいかった子供が、こんなにたくましくなって、りっぱになって、そして今度は先生になって生徒を連れてきてくれました。私は矢作川上下流の交流が受け継がれ、次の世代に引き継がれていることに喜びを感じました。

潮干狩りでは、私たちは一人で二人の子供に潮干狩りのしかたや海の生き物について教える 1 日先生になります。まる 1 日子供たちと過ごし子供たちとの別れのときに、自分たちが教えた二人の子供がバスから手を振ってくれたときは、うれしさと別れの寂しさで毎

年体が震えます。一緒に潮干狩りをした私の二人の子供が、上流で川をきれいにしてくれることを祈り、そしてまた子供たちの成長を祈り、再び再開できることを期待して私たち会員は子供たちと楽しい交流を続けております。

川や海はいろいろなもので汚れております。現在の生活の向上とともに、生活排水は川や海を最も汚すものとなっております。そこで私たちは、排水の処理状況を調査するとともに、水質浄化の意識の高揚を図り、天ぷら油の廃油を使って作る天然石けんの製造にも積極的に取り組んでおります。

昭和 54 年に知立市の生活学校消費者婦人部と天然石けんについて対話をしたことをきっかけに、滋賀県の天然石けん運動を視察したりして勉強し、昭和 56 年に天然石けん手作り施設が完成したことにより、本格的に取り組み始めました。最初は矢水協のご指導を頂き、見よう見まねで作っておりましたが、今では自分たちだけで天然石けんの指導もできるようになりました。最近では、町内の小中学校の生徒もこうした環境問題にも目を向けるようになり、石けんづくりの作業に参加するようになりました。生徒たちは、家から天ぷら油の廃油を持ち寄り、それぞれ大きな釜に入れて煮詰めたりかくはんしたりして、石けんができて上がったときにはとても不思議そうです。

今私が手に持っているのが、そのときの手作りの天然石けんです。これは洗濯機で使う粉石けんです。天然せっけん作りもみんなで行っています。

こうした子供たちとの交流はとても楽しく、私たちの活動が社会に役立っているのかなと感じられる充実感があり、会員の生きがいの源になるような思いがいたします。私たちの作った天然石けんは、いろいろなイベントに参加して配布したり、そして天然石けんの普及促進と川や海の水質浄化の意識の高揚と併せてPRも行っております。

最近の私たちの活動は、矢作川の水質浄化だけではなく、矢作川が注ぐ三河湾や排水路の水質浄化にも、一般町民にも呼びかけて活動を行っております。そして、「矢作川をきれいにする会」の会員も一丸となって、海岸清掃をしたり河川の清掃をしたりと、一生懸命汗を流して頑張っております。

親子環境塾においては、私たちの天然石けん製造施設で、会員が指導して“親子で一緒に石けんを作る体験”をしてもらったり、“干潟の生き物の観察”や“排水路の散策”など、親子で楽しんで水質浄化を考え、皆さんと一緒に考えていただけるように、町、行政と一緒に活動も行っております。

私たちは、「矢作川をきれいにする会」と赤く染め抜いた“たすき”を掛けて、長靴を履いて、パトロールに出かけます。企業においても市町村役場においても、私たちのこうした活動はよく汲み取っていただけるものと思っておりますが、私たちの気持ちがこの“たすき”の中に入っております。最近では、矢作川上流の皆様のご理解により、パトロールの実施当初と比べますと必然性が段々と薄れてまいりました。しかし、矢作川の上流・中

流・下流の水質状況を常に把握するため、上流の役場や企業を回り、水質浄化の協力をお願いしております。それでもなお汚れる町内の河川には、みんなで美しい川にしていこうではないかと水質浄化を呼びかけ、看板を立てております。

また、三河湾においても、海の環境を知っていただくことが大切ではないかと思い、三河湾環境観察クルージングを行いました。町内より100名もの参加者があり、ノリの摘み取り作業を見たり、のり養殖の様子を見ながら沖へ出ました。海面に浮き沈みしているビニールや空き缶、ごみなどを見て、「遠くで見ているとあんなにきれいな海なのに」とびっくりした様子でした。そうしたものは、のり養殖だけではなく、海の生き物、そしてまた漁船にも被害を与えてしまうことを説明すると、みんなうなずいていました。



そこへスナメリの群れが、あちらにもこちらにもポッコンポッコンと現れます。子供たちはもう「おーい、おーい」と大騒ぎです。こうした生き物を見て、海の環境の大切さを分かっていたいだいたと思います。

矢作川の水は、上流より三河湾に注がれます。上流の森林は、きれいな水を育む命の泉です。落葉樹は葉を落とし、腐葉土となって土を肥やし木々を育ててくれます。その木々は水を育み、命の泉となって矢作川に流れ込み、私たちにきれいな水を運んでくれます。しかし、その森を守るのは人間です。自然と人間との交流、それによって森も川も海も美しく守ることができるのだと思います。

昨年度、私たちは、その森を守るためにはどうしたらよいのかと、みんなで考え、少しでもできることをと、矢作川の水源林の枝打ち、下草刈りを行いました。汗を流しながらの作業は大変でしたが、私たちは森や林に恩恵を受けて生きているのです。森林を守ってくださる皆さんに本当に頭の下がる思いでした。

「矢作川をきれいにする会」も30周年という一つの節目の年を迎えることができました。「白い川」矢作川。抗議と対立。その中で30年という時を経て得た矢作川の豊かなせせらぎは、私たちにとって何にも代え難いうれしいものです。矢作川にも三河湾にもいろいろな生き物が戻ってくるようになりました。これからも母なる川、矢作川、命の海を守り、より一層、上・下流域の皆様と相互連帯の強化を図りながら、活動の輪を大きく大き

く広げていき、やがては美しい川や海を未来の子供たちに残していきたいと思います。皆様がたのご協力により得た矢作川の清流。これからも私たちは大切に、みんなで維持、向上に努めてまいりたいと思います。

矢作川が注ぐ一色の海で、潮干狩りをした子供たちから、私が今持ってますようにお礼の作文をたくさん頂いております。みんながこうして作文を書いて、海をきれいにしてくれます。川をきれいにしてくれます。こうした上流の子供たちの気持ちを大切にしながら、これからも私たちは頑張ってます。どうぞ皆様がたも、今後ご指導、ご協力をくださいますようお願い申し上げます、私のつたない発表を終わらせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

私たち「矢作川をきれいにする会」は、ここに設立30周年を迎えるにあたり、心も新たに更に河川浄化運動を積極的に展開し、会の目的達成のため、次の事項を一層推進いたします。

- 一、 私たちは、川と海の水質汚濁防止活動を推進します。
- 一、 私たちは、流域に暮らす人々の、川と海の浄化意識の向上に努めます。
- 一、 私たちは、日常生活において、一人ひとりが川と海を汚さないルールを守ります。
- 一、 私たちは、流域の人々と交流を深め、相互理解に努めます。
- 一、 私たちは、資源を大切にす循環型社会をめざします。

以上決議する。

平成15年10月14日

矢作川をきれいにする会

